本学における不本意入学者の特徴（2）：
東北学院大学新入生意識調査の分析2011-2015

神林　博史

1. はじめに

ここ10年ほどの間、４年生大学進学率は50％前後で推移しており、大学進学はいわゆる「ユニバーサル段階」に本格的に突入した。とはいえ、すべての大学生が第一希望の大学に入学できるわけではなく、少なからぬ学生が理想と現実の乖離に直面することになる。ベネッセ総合教育研究所が行った「第２回大学生の学習・生活実態調査」（2012）によれば、「他の大学に入りなおしたい」（転学意向）あるいは「大学を辞めて大学以外の進路に変更したい」（退学意向）と考えたことのある大学１年生は、前者が約40%、後者が約17%であり、この比率は大学の偏差値が低くなるほど高くなる傾向にある（樋口2013）。転学意向・退学意向の原因はいくつか考えられるが、その１つが不本意入学である（樋口2013）。

したがって、本学の新入生の中に不本意入学者がどれくらい存在するのか、不本意入学者にはどういった特徴があるのかを把握することは、入学後の学生サポートのあり方を考える上で重要な課題となる。本学における不本意入学者の特徴については、以前に筆者が2011年度から2013年度までの新入生調査データを用いた分析を行なった（神林2014）。この分析では、新入生が本学を第一希望としていたか否かの基準に基づいて、不本意入学者とそうでないものを分類した。しかし実際には、不本意入学者は一枚岩ではなく、内部に異質性が存在すると考えられる。そこで本稿では、神林（2014）の不本意入学の分類に改良を加えた上で、2011年度から2015年度までの最近5年間の本学における不本意入学者の特徴とその変化を分析する。

2. データ

使用するデータは、本学の新入生意識調査の2011年度から2015年度までの５年分のデータである。この調査は、４月初旬の新入生オリエンテーションにおいて実施される。新入生オリエンテーションへの参加は新入生の義務であり、なおかつオリエンテーションに参加した学生は基本的に全員が調査に回答することになるので、この調査は実質的に新入生を対象とした全数調査となっている。調査方法は配票自記式で、新入生に調査票（マークシート式）が配布され、その場で回収される。

調査内容は、(1) 新入生の性別、出身地、出身高校などの基礎項目、(2) 受験に関する項目、(3) 今後の大学生活に関する質問、の３種類に大別される（調査項目の詳細とその変遷

については、神林（2014）および神林（2015）を参照）。なお、2014年度調査から、調査票の最後の部分で学生番号の記入を求めており（記入は学生の任意）、その後の成績データ等との対応づけが可能になっている（神林2015）[1]。

3. 分析

3.1 不本意入学のタイプ分け

先述のように、筆者はかつて新入生意識調査データを用いて不本意入学の実態を分析したが、その際に不本意入学学生とそうでない学生を区別するために用いたのは受験時の希望校に関する質問であった。具体的には、第一希望が入学した学科でなかった場合、その学生を不本意入学とみなした（神林2014）。

とは言え、不本意入学者が発生する理由は、第一希望の大学（もしくは学部・学科）に入学できたか否かだけではない。小林哲郎は不本意入学を、(1) 第一志望不合格型、(2) 合格優先型（合格可能性を追求して受かりやすい大学に入学）、(3) 就職優先型（自分の興味・関心よりも就職の有利さを優先して入学）、(4) 家庭の事情型（「自宅から通学できる」「学費が安い」など地理的・経済的事情を優先して入学）、の４つのタイプに分類している（小林2000）。新入生意識調査の質問項目では残念ながらこれらの不本意入学の類型を明確に区別することは難しいが、１つの試みとして、所属学科に入学したことの満足感に注目して不本意入学者を2つのタイプに分類してみたい。

神林（2014）で示したように、本学の場合、新入生の45％程度が入学学科を第一希望としておらず、小林の言う第一志望不合格型の不本意入学に相当する。その一方で、所属学科に入学したことの満足感は総じて高く、全体で約90％、不本意入学者に限定しても約70％以上が所属学科に入学したことに「満足」と回答していた。このことは、所属学科が第一希望ではなかったとしても、入学できたことにそれなりに納得している学生が多いことを意味する。逆に、所属学科が第一希望ではなく、なおかつ入学したことに不満であれば、その学生の不本意度は、他の学生に比べて高いと考えらえる。

そこで受験時の第一希望に関する質問への回答と、所属学科に入学したことについての満足感への回答を組み合わせることで、不本意入学の学生を２つのタイプに分類することができる。すなわち、(1) 所属学科が第一希望ではなく入学したことに満足していない層、(2) 所属学科は第一希望ではなかったものの入学したことに満足している層、である。前者を「狭義の不本意入学」、後者を「準不本意入学」と呼ぶことにしよう。第一希望の回答と入学満足度の回答の組み合わせと、不本意入学のタイプの対応関係をまとめたのが表１である。

[1] 学生番号の回答率は2014年度が51.3%、2015年度が57.5%であった。

表１ 本稿における不本意入学者の分類

第一希望か否か	所属学科に入学したことの満足感	
	満足	不満
所属学科が第一希望	非不本意入学	
所属学科が第一希望ではない	準不本意入学	狭義の不本意入学

本稿ではこの分類法に基づいて、不本意入学者の特徴について若干の分析を行なう。

これら２つのタイプの不本意入学者がどのくらい存在するのかを示す前に、分類の基準となる２つの変数の分布を確認しておこう。まず表２は、大学受験時の第一希望がどこであったかの回答をまとめたものである[2]。

表２ 第一志望の変化（2011-2015）

数値：％

第一希望	2011 年	2012 年	2013 年	2014 年	2015 年
東北学院大学（所属学科）	54.9	54.3	56.5	58.9	59.0
東北学院大学（所属学科以外）	5.5	5.8	5.1	6.0	5.5
他大学（国公立）	31.8	31.6	29.5	28.4	28.6
他大学（私立）	6.8	6.9	6.0	5.2	5.7
その他	.1	.2	.2	.4	.1
無回答	.9	1.2	2.7	1.1	1.1
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
N	2984	2766	2810	2748	2811

所属学科を第一希望とした学生は緩やかに増加しており、この５年間で約４ポイント上昇している。これに対応して「他大学（国公立）」と「他大学（私立）」の割合が減少している。

次に、所属学科に入学したことの満足感の回答分布をまとめたのが表3である[3]。

「たいへん満足である」の割合が５年間で約６ポイント上昇している。「どちらかと言えば満足」と「どちらかと言えば不満」がその分減少しているが、「たいへん不満」の割合に大きな変化はない。総合的に見ると入学時の満足度は上昇しているが、これは第一希望入学者比率が増えたことと連動していると考えるべきだろう。

[2] 質問文は「あなたが東北学院大学を受験する時点で、あなたの第一希望、第二希望の大学はどこでしたか」。選択肢は「東北学院大学の○○学部○○学科」（○○学部○○学科には所属学部・学科名が入る）「東北学院大学の他の学部学科」「他の国公立大学」「他の私立大学」「その他」。

[3] 質問文は「あなたは東北学院大学の○○学部○○学科に入学したことにどの程度満足していますか」（○○学部○○学科には所属学部・学科名が入る）。選択肢は「たいへん満足している」「どちらかと言えば満足している」「どちらかと言えば不満である」「たいへん不満である」。

表３　所属学科に入学したことの満足感（2011-2015）

数値：%

入学満足度	2011 年	2012 年	2013 年	2014 年	2015 年
たいへん満足	31.3	31.5	32.2	34.5	37.8
どちらかと言えば満足	55.6	55.7	52.8	53.6	51.4
どちらかと言えば不満	10.2	9.9	9.6	9.2	8.6
たいへん不満	1.3	1.4	1.4	1.6	1.4
無回答	1.6	1.6	4.0	1.1	.8
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
N	2984	2766	2810	2748	2811

これら２つの変数を組み合わせて、不本意入学を２つのタイプに分類した結果は表４のようになる。第一希望は「所属学科」と「それ以外」に２分、入学満足感は「満足」（たいへん満足＋どちらかと言えば満足である）と「不満」（どちらかと言えば不満である＋たいへん不満である）に２分した上で組み合わせた。なお、表２および表３から明らかなように、２つの変数には無回答が存在する。２つの回答のいずれかに無回答だった学生は「分類不能」に分類される。

表４　不本意入学者の割合の変化（2011-2015）

数値：%

	2011 年	2012 年	2013 年	2014 年	2015 年
非不本意入学	55.4	55.0	58.2	59.6	59.6
準不本意入学	34.6	35.6	32.4	31.2	31.9
狭義の不本意入学	10.0	9.4	9.4	9.2	8.5
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
N	2921	2709	2679	2705	2766

注）分類不能を除く

非不本意入学は、2011年度が55.4％であったのが2015年度には59.6%となり、微増していることがわかる。これに対応して、準不本意入学と狭義の不本意入学の割合が減少しているが、2011年度から2015年度にかけての変化量は前者が2.7ポイント、後者が1.5ポイントで、狭義の不本意入学の変化が少ないことがわかる。

3.2　どのような学生が不本意入学するのか

このように、不本意入学学生の割合は、ここ５年間では大きな変化はないことがわかった。次に、どのような学生が不本意入学者になるのかを検討しよう。不本意入学は出身高校の種別および入試方法との関連が強いので（神林2014）、これら２つの変数との関連を検討して

みよう。

まず、出身高校の種別と不本意入学者の関係を分析しよう。高校種別は「進学校」（４年制大学志望者がほとんど）、「準進学校」（４年制大学志望者が半分以上）」、「準非進学校」（４年制大学志望者が半分以下）、「非進学校」（４年制大学志望者はほとんどいない）、の４

表５　出身高校類型別不本意入学割合（2011-2015）

数値：％

		進学校	準進学校	準非進学校	非進学校
2011 年	非不本意入学	40.6	62.1	76.6	80.9
	準不本意入学	43.8	31.8	20.6	13.8
	狭義の不本意入学	15.6	6.1	2.8	5.4
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0
	N	1324	972	393	203
2012 年	非不本意入学	41.9	59.2	75.7	88.4
	準不本意入学	44.4	33.7	21.1	9.1
	狭義の不本意入学	13.7	7.1	3.2	2.4
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0
	N	1282	897	346	164
2013 年	非不本意入学	41.2	65.5	82.0	82.0
	準不本意入学	44.2	28.2	14.3	15.1
	狭義の不本意入学	14.7	6.4	3.7	2.9
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0
	N	1173	941	377	172
2014 年	非不本意入学	43.6	61.7	83.8	83.1
	準不本意入学	41.0	31.8	13.6	13.9
	狭義の不本意入学	15.4	6.6	2.6	3.0
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0
	N	1063	991	420	201
2015 年	非不本意入学	43.9	65.1	77.4	85.6
	準不本意入学	42.5	28.8	19.4	13.0
	狭義の不本意入学	13.6	6.1	3.2	1.4
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0
	N	1137	1028	372	208

[4] 高校種別の質問文は「あなたが卒業した高校は？」。選択肢は「1.進学校だった（４年制大学志望者がほとんど）」「2.どちらかといえば、進学校だった（４年制大学志望者が半分以上）」「3.どちらかといえば、進学校ではなかった（４年制大学志望者が半分以下）」「4.進学校ではなかった（４年制大学志望者はほとんどいない）」「5.非該当」の5カテゴリーである。本稿では1を「進学校」、2を「準進学校」、3を「準非進学校」、4「非進学校」とする。「非該当」はケース数が少ないため分析から除外した。

カテゴリーに分類される[4]。分析の結果を表５にまとめた。

進学校度が高いほど狭義の不本意、準不本意の割合が高いことがわかる。特に進学校出身者は半分以上が不本意入学である。その割合自体は、この５年間では大きく変化していない。

次に、入試方法と不本意入学の関係を分析しよう。入試方法は（1）AO、（2）学業推薦、（3）スポーツ推薦、（4）TG推薦、（5）一般入試、（6）センター試験利用、（7）その他、の7カテゴリーに分類した[5]。分析の結果を、表６にまとめた。

表６　入試類型別不本意入学割合（2011-2015）

数値：％

		AO	学業推薦	スポーツ推薦	ＴＧ推薦	一般	センター試験	その他
2011 年	非不本意入学	91.9	90.1	83.3	92.6	35.0	14.8	63.8
	準不本意入学	7.2	9.3	12.3	6.4	51.1	60.3	26.6
	狭義の不本意入学	.9	.6	4.4	1.0	13.9	24.9	9.6
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	N	346	483	114	204	1355	325	94
2012 年	非不本意入学	95.8	87.1	84.8	89.7	34.9	13.5	63.2
	準不本意入学	3.9	11.7	15.2	9.4	52.3	61.5	28.9
	狭義の不本意入学	.3	1.2	0.0	1.0	12.7	25.0	7.9
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	N	356	420	105	203	1185	364	76
2013 年	非不本意入学	92.8	91.0	88.7	81.0	32.9	13.4	90.7
	準不本意入学	5.8	7.8	10.4	14.7	52.7	63.3	7.4
	狭義の不本意入学	1.4	1.2	.9	4.3	14.4	23.3	1.9
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	N	359	575	106	231	981	373	54
2014 年	非不本意入学	96.4	88.3	82.4	94.6	29.7	10.5	53.1
	準不本意入学	2.7	10.4	16.8	4.3	54.5	65.0	31.3
	狭義の不本意入学	1.0	1.4	.8	1.1	15.9	24.5	15.6
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	N	411	665	119	185	984	277	64
2015 年	非不本意入学	94.1	87.2	76.9	91.8	30.7	11.1	76.5
	準不本意入学	5.4	11.8	21.4	7.3	55.0	63.0	19.6
	狭義の不本意入学	.5	1.0	1.7	.9	14.3	25.9	3.9
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	N	410	689	117	219	964	316	51

不本意入学者は一般入試およびセンター試験利用入試に多い。これらの入試方法で志願する層は本学を滑り止めとする傾向が強いので、当然の結果といえよう。これに対し、AO入試と各種推薦入試の不本意率はかなり低い。とはいえ、そもそもこれらの入試方法の場合、所属学科を第一志望とする学生が受験するのが建前であるから（特にAO入試）、わずかとは言え不本意学生が存在することを問題と考えるべきなのかもしれないが。なお、一般入試とセンター試験利用入試における不本意入学学生の割合は、５年間の間に微妙に増加していることがわかる。

以上のように、進学校出身の学生ほど、そして一般入試やセンター試験利用入試によって入学した学生ほど不本意入学の割合が高いことはわかったが、そうした学生は結果としてどの学部・学科に入学しているのだろうか。学科ごとの狭義の不本意入学者の割合をまとめたものが図１である（2015年度より募集が停止された英文学科（夜間主）の結果は省略した）。

注）英文学科（夜間主）の結果は省略した。

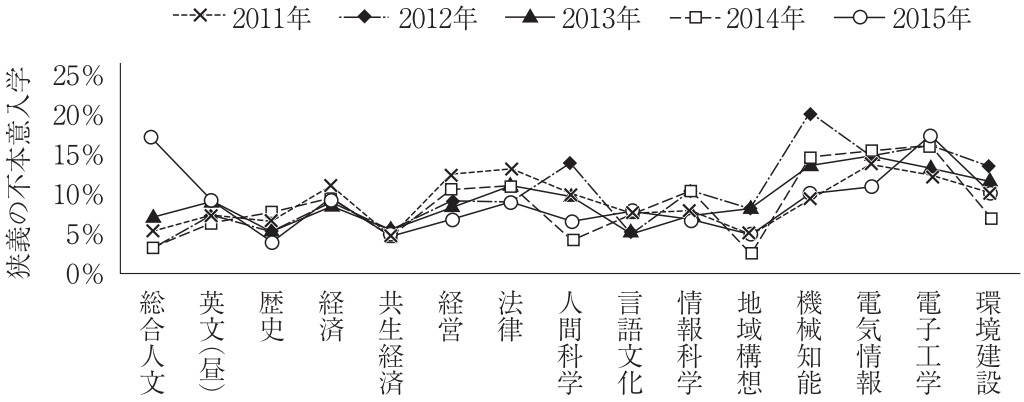

図１　学科別狭義の不本意入学割合（2011-2015）

各学科の不本意入学者の割合は、共生社会経済学科を除いて年度による年度によるばらつきが大きく、特定の学科の不本意入学率が高いという傾向はない（ただし、学部別に見ると工学部の不本意入学率は他学部に比べると平均的に高い）。共生社会経済学科は不本意入学者比率が５年間でほぼ一定（５％程度）であるが、これはこの学科の教育内容が特徴的であ

[5] 新入生意識調査における入試方法の選択肢は、(1) AO、(2) 学業推薦、(3) 資格取得推薦、(4) キリスト者等推薦、(5) スポーツ推薦、(6) 文化活動推薦、(7) TG推薦、(8) 帰国生特別、(9) 社会人特別、(10) 外国人留学生特別、(11) 一般：前期、(12) 一般：後期、(13) センター試験：前期、(14) センター試験：後期、の14種（以上は2014年以降の調査票の選択肢。2013年以前のものは選択肢の順番が異なる）。ここでは入学者数が比較的少ない (3) (4) (6) (8) (9) (10) を「その他推薦等」に統合した。また、一般入試とセンター試験はそれぞれ前期・後期を統合した。また、DKは分析から除外した。

り、他大学や本学の他学部・他学科と競合しにくいためかもしれない。

3.3　不本意入学者の大学生活への展望

それでは、不本意入学者は入学後の学生生活にどのような展望を抱いているのだろうか。新入生意識調査では、「大学生活で特に力を入れたいこと」と「大学生活での不安」についても質問している。ただし、これらの質問は2013年度までと2014年度以降では質問内容・形式が大きく変更されたため（特に大学生活での不安）、ここでは2014年度と2015年度の結果のみを分析する。

まず、「大学生活で力を入れたいこと」だが、これは「あなたが、大学生活で特に力を入れたいことは何ですか。2つ以内で選んでください」という質問で測定される。選択肢は表7に示された12項目の他に「特にない」「その他」があるが、この2項目は回答数が少ないので除外した。不本意入学と「力を入れたいこと」の関係を表７に示す。なお、どの項目において不本意入学者とそれ以外の学生の意識に差があると言えるのかの目安としてカイ二乗検定

表７　不本意入学と「大学生活で力を入れたいこと」の関係

数値：%

大学生活で力を入れたいこと[1]	2014年 非不本意入学	2014年 準不本意入学	2014年 狭義の不本意入学	2014年 χ^2検定	2015年 非不本意入学	2015年 準不本意入学	2015年 狭義の不本意入学	2015年 χ^2検定
1.　専門分野に関する深い知識や技能を習得する	36.4	32.1	30.4	*	37.4	35.8	36.6	
2.　知識を広げ、教養を高める	27.9	28.4	22.8		32.0	29.6	27.7	
3.　人生の根本問題を深く考え、精神的に成長する	5.2	3.4	4.4		4.6	4.8	3.8	
4.　多くのことにチャレンジし、経験や見聞を広める	20.3	19.9	14.4		19.1	19.1	15.7	
5.　ボランティア活動など社会に貢献できる活動をする	4.7	3.6	4.0		3.1	3.9	4.3	
6.　一生の友人となるような親しい友人をつくる	8.7	7.5	4.4		7.6	6.1	3.8	
7.　交友関係をひろげ、多くの友人をつくる	19.6	16.9	10.4	*	17.9	16.2	12.3	
8.　自分のめざす進学・就職のための準備をする	27.2	35.3	45.6	*	27.3	39.2	43.0	*
9.　自分にあった進路や仕事を見いだす	21.8	22.5	19.6		21.4	21.6	20.0	
10.　趣味や好きなことに時間をさく	5.3	6.0	6.8		5.3	5.0	5.1	
11.　クラブやサークルで活動する	17.8	14.0	11.6	*	16.5	13.1	13.2	
12.　アルバイトをする	5.3	6.3	10.4	*	5.1	4.6	7.7	

[1] あてはまるものを２つまで選択、* $p<.05$

（両側検定）を行った（厳密に言えば、本調査は全数調査なので検定を行なう必要性は低いのだが）。

まず2014年度では、不本意入学学生はそうでない学生に比べて「専門分野に関する深い知識や技能を修得する」「交友関係をひろげ、多くの友人をつくる」「クラブやサークルで活動する」と回答する割合が有意に少ない。このことは、不本意入学者は勉学および人間関係の両面で大学生活に期待していない傾向があることを示唆している。一方で不本意入学者「自分のめざす進学・就職のための準備をする」を重視する傾向がある。これは上述の大学生活に期待しない傾向の裏返しと考えられる。また、「アルバイトをする」を重視する傾向もあるが、これは不本意入学者に国公立大学希望が多いことを考えると、経済的な問題を反映しているのかしれない。そして、以上の傾向は、準不本意入学者よりも狭義の不本意入学者でより明確に現れている。

2015年度では、統計的に有意なのは「自分のめざす進学・就職のための準備をする」のみになっており、全体的に不本意入学との関連は弱くなっている。とはいえ、統計的に有意でなくとも、全体的な回答傾向は2014年度と大きく変わっていない。特に、2014年度で有意だった、交友関係に関する項目（「交友関係をひろげ、多くの友人をつくる」「クラブやサークルで活動する」）において、不本意入学学生の重視度が低いのは気になるところである。

次に、大学生活での不安について分析しよう。これは「あなたは、大学入学後のことについて、次のような不安を感じていますか」という質問文で測定される。対象となるのは、(1) 大学の勉強についていけるか、(2) 親しい友人ができるか、(3) 希望する就職・進学ができるか、(4) 経済的にやっていけるか、(5) 充実した大学生活が送れるか、の５項目である。選択肢は「不安である」「やや不安である」「あまり不安はない」「不安はない」の4択だが、「不安である」「やや不安である」の2カテゴリーを合わせて「不安」とし、この不安率と不本意入学との関係を表8にまとめた。

統計的に有意なのは、「大学の勉強についていけるか」で2014年度、2015年度とも不本意入学者の方がそうでない学生が低い。これは、不本意入学者が基本的に本学よりも学力レベルの高い大学を志望していたことを考えれば当然の結果であろう（実際、不本意入学者はそうでない学生に比べて成績不振に陥りにくい（神林2015））。

これに対し、「充実した大学生活が送れるか」の不安感は不本意入学者の方が高く、2014年度は統計的に有意になっている。2015年度も、有意ではないものの回答傾向は2014年度と変わらない。このことは「力を入れたいこと」で示された不本意入学者の大学生活軽視傾向の裏返しと見るべきだろう。

なお、以上の傾向は2013年度以前の結果（神林2014）と共通するものである。質問形式お

表８　不本意入学と不安感の関係

数値：%

	2014年				2015年			
	非不本意入学	準不本意入学	狭義の不本意入学	χ^2 検定	非不本意入学	準不本意入学	狭義の不本意入学	χ^2 検定
大学の勉強についていけるか	92.5	80.7	56.0	*	91.9	81.2	54.7	*
親しい友人ができるか	71.1	72.6	70.2		73.5	74.0	70.5	
希望する就職・進学ができるか	91.1	90.7	87.4		89.6	89.1	90.2	
経済的にやっていけるか	63.0	61.8	57.9		62.4	60.1	59.4	
充実した大学生活が送れるか	69.0	71.1	78.0	*	70.7	69.9	73.8	

「不安である」と「やや不安である」の合計比率、* $p<.05$

よび内容が異なるため2013年度以前と2014年度以降の直接比較は行なえない部分があるが、全体的な傾向はここ５年で変化していないと言える。

4. おわりに

本稿の分析結果をまとめると、以下のようになる。

(1) 不本意入学者はこの５年間で微減している。ただし準不本意入学、狭義の不本意入学の間での割合の大きな変化はない。

(2) 進学校の生徒ほど、また一般入試およびセンター試験利用入試で入学した学生ほど不本意入学者になりやすい。この傾向は、準不本意入学者よりも狭義の不本意入学者で強い。

(3) 不本意入学者は、大学生活に期待していない傾向がある。一方で、成績に関する不安感は低い。この傾向は、準不本意入学者よりも狭義の不本意入学者で強い。

以上の傾向は常識的なものと言えるが、学生の大学生活への適応を考える上で注意すべきポイントではあるだろう。

不本意入学者は、進学校出身者が多く、勉学に関する不安が小さいことから、学力的には比較的高い水準にある（神林2015）。したがって、こうした学生を大学生活からドロップアウトさせることなく育てることは、本学の学生の平均的な能力の向上に寄与し、その結果として本学のプレゼンスを向上させることにもつながると考えられる。

そのために何が必要かについてはすでに拙稿（神林2014）で説明したが、改めてその結論

を確認しておこう。樋口健によれば、転学意向を有する学生の大学満足度を上げるためには「人間関係を活かした学びの促進と共同の実感」および「しっかりとした学びの促進と専門基礎等の成果」が、退学意向を有する学生の大学満足度を上げるためには、「対話を交えた学びなおし」、「学び・協力しあえる友人づくりと共同の実感」および「学び・生活への基礎的態度の育成」が重要であるという（樋口2013）。これらは、本稿の分析において示された「不本意入学者が大学生活において重視しない（力を入れない）」点に他ならない。したがって、これらの点を日々の教育活動の中でいかに強化していくかが、不本意入学に由来する大学生活の不適応を解消するために重要といえるだろう。

参考文献

樋口健.2013.「大学1年生の転学・退学の意向とその処方箋」ベネッセ教育研究所
<http://berd.benesse.jp/berd/focus/4-koudai/activity3/>（2015年12月20日取得）

小林哲郎.2000.「大学・学部への満足感」小林哲郎・高石恭子・杉原保史（編）『大学生がカウンセリングを求めるとき』ミネルヴァ書房　所収

神林博史.2014.「本学における不本意入学者の特徴」『教育研究所報告集』14:15-25.

神林博史.2015.「2014年度新入生意識調査から見た新入生の特徴と入学後成績の関係」『教育研究所報告集』15:17-29.